

2年3か月の大規模改修工事を経て開催する初の展覧会
リニューアルオープン記念特別展 **Before/After**

PRESS RELEASE 2023.1

新規
情報

- ・前売券情報
- ・協力、協賛
- ・関連プログラム
- ・既出の作家8名に加えて、田村友一郎も本展のための新作を発表
- ・平田尚也 VR 作品予約に関して



シリン・ネシャット 《Land of Dreams》2019 Courtesy of the artist and Gladstone Gallery © Shirin Neshat

展覧会名 リニューアルオープン記念特別展 **Before/After**

会 期 2023年3月18日（土）— 6月18日（日）

開館時間 10:00—17:00 ※入場は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日

観 覧 料 一般 1,600 円 (1,250 円)、大学生 1,200 円 (900 円)、
高校生・65 歳以上 800 円 (600 円)、中学生以下無料

※（ ）内は前売り及び 30 名以上の団体料金

[前売券取扱] チケットぴあ〈P コード 686-367〉、広島市現代美術館オンラインショップ



主 催 広島市現代美術館

協 力 KENJI TAKI GALLERY、LEESAYA、SCAI THE BATHHOUSE、
S.O.C. Satoko Oe Contemporary、The Third Gallery Aya

協 賛 丸子硝子株式会社

後 援 広島県、広島市教育委員会、中国新聞社、朝日新聞広島総局、毎日新聞広島支局、
読売新聞広島総局、NHK 広島放送局、中国放送、テレビ新広島、広島テレビ、
広島ホームテレビ、広島エフエム放送、尾道エフエム放送

本件に関するお問い合わせ

広島市現代美術館 広報担当：国広、岩本

〒732-0815 広島県広島市南区比治山公園 1-1 TEL: 082-264-1121 (代表・掲載用) 082-264-1146 (直通)

FAX: 082-264-1198 E-MAIL: genbi_05@cf.city.hiroshima.jp WEB: www.hiroshima-moca.jp

展覧会概要

現在、大規模改修工事のため長期休館中の広島市現代美術館は、2023年3月にリニューアルオープンを迎えます。美術館の再開にあたり、全館を用いた特別展「Before / After」を開催いたします。

このたびの建物改修の前後を比べてみると、一見して違いがわかる場所もあれば、わかりづらけれども言われてみれば変わったことに気づく、という箇所もあるでしょう。本展では、美術館建物の改修工事という出来事を契機に生じる「前／後」をひとつの足がかりとして、さまざまな「まえ」と「あと」の現象や状況に着目します。例えば、経年によるものの変質や劣化、そして修復による対応は、作品や資料を収蔵する美術館では避けては通れない問題です。また、広島を中心に建設され、県の産業奨励館として知られていた建物は、被爆後にはヒロシマを象徴する遺構へと姿を変え、原爆ドームという愛称のもと、都市風景の一部となっています。都市を破壊し、人々に健康被害をもたらした核エネルギーは、その後、原子力発電のエネルギー源として世界に繁栄をもたらすとも信じられました。このように、歴史を振り返れば、いくつもの分岐点としての出来事や決断があり、変更や変化が起こってきたことに気づきます。私たちは過去からなにを学び、どのような未来を見ているのでしょうか。旧約聖書によれば、かつて樂園で禁を破って知恵をつけ、そこから追放された人類の末裔は、いまなお世界のいたるところで諍いを起こし、他者の生活を脅かすなど、さまざまな問題を抱えています。それでもなお私たちは、夢や希望を抱くことを忘れず、自らを癒し、ときに後ろを振り返りながらそれぞれの歩みで前へ進んでいくのではないのでしょうか。

本展では、社会の変化やシステムにおける綻び、隠され葬り去られた過去や歴史があることを敏感に察知し、作品として発表してきたアーティストたちを取り上げます。彼らは、それぞれのやり方で出来事と真摯に向き合い、変転や変遷のあとさきを静かに想起させる、美しく力強い作品を発表してきました。これらの作品を通じて、さまざまな事象の「まえ」と「あと」とを想起し、変化の有無や差異を認識するのはもちろんのこと、さらにその背景や一連の顛末によってもたらされる功罪や意義を省察する機会となれば幸いです。

出品作家

鬮嘔、石内都*、伊藤公象、井上覚造、大岩オスカー、岡本太郎、デニス・オッペンハイム、オノ・ヨーコ、河原温、コウミユキ*、笹岡啓子、鳴剛、四國五郎、下道基行、新生タイポ・プロジェクト（岡澤慶秀、岡本健+）、SUPERFLEX、菅井汲、ナンシー・スペロ、高橋銃*、高山良策、竹村京*、田中功起、田村友一郎*、蔡國強、土田ヒロミ、殿敷侃、毒山凡太郎*、2m26、シリン・ネシャット、ダラ・バーンバウム、浜田知明、ジョン・バルデッサリ、平田尚也*、吹田文明、キース・ヘリング、細江英公、松澤宥、南薫造、宮川啓五、ヘンリー・ムーア、森村泰昌、ヤノベケンジ、横山奈美*、若林奮、和田礼治郎*

45名／組

*のアーティストは、本展のために新作を発表

関連プログラム

オープン記念アーティストトーク

出品アーティストによるリレー形式でのトーク。

参加作家 コウミユキ、高橋銃、竹村京、田村友一郎、
毒山凡太郎、平田尚也、和田礼治郎（予定）

日時 2023年3月18日（土） 14:00-16:00

場所 展覧会場



リレー形式でのアーティストトークの様子

学芸員によるギャラリートーク

① 展覧会編

日時 2023年3月25日（土） 14:00-15:00

場所 展覧会場 ※要展覧会チケット、申込不要



ギャラリートークの様子

② 建築フォーカス編

日時 2023年3月26日（日） 14:00-15:00

場所 美術館内外 ※要展覧会チケット、申込不要



建物ツアーの様子

Photo: Kenji Kagawa

アートナビ・ツアー ※学芸員によるギャラリートーク開催日は除く

A 展示室

日時 毎週土・日・祝 各日 11:00-11:30、14:00-14:30

場所 展覧会場 ※要展覧会チケット、申込不要



アートナビ・ツアーの様子

Photo: Kenji Kagawa

B 展示室

日時 毎週土・日・祝 各日 11:45-12:15、14:45-15:15

場所 美術館内外 ※要展覧会チケット、申込不要

モカモカ・ワークショップ

休館中に館外で活躍していた2m26制作の「ツールボックス」がモカモカに登場！用意してある材料を使って、お絵描きや工作が自由に楽しめます。

日時 毎週日曜日 10:00-16:30

場所 モカモカ（新設の多目的スペース） ※無料、申込不要



2m26「ツールボックス・プロジェクト」より

Photo: Nozomi Tomoeda

本展を楽しむ3つの視点

1 美術館の改修工事、何が変わった？



インスタグラム「工事日記」より

1989年の開館以来初となる大規模改修工事を経てリニューアルオープンする広島市現代美術館。本展では改修工事の完了した建物も展示の一部です。展示室には改修工事の図面や記録写真、動画などの資料に加え、LED化のため役目を終えた照明器具、古いエレベーターの部品やサイン、取り替えとなった大理石の欠片など、工事現場から救いあげたものたちを展示します。設備が更新された場所、見えないけど変わっている、あるいは変わらない場所など、まずは建物の「まえ」と「あと」をご覧ください、新しくなった美術館をお楽しみください。

2 美術を通してみる様々な「まえ」と「あと」



シリン・ネシャット《Land of Dreams》
2019 Courtesy of the artist and
Gladstone Gallery © Shirin Neshat

これまでに当館が収集してきたコレクションを中心に、本展のための新作を含む、およそ100点で構成。建物の改修工事で生じる「前／後」をひとつの足がかりとして、劣化、再生、原子力、爆発、夢、楽園など、縦横無尽にひろがるキーワードを美術館の活動とも接続させながら、様々な「まえ」と「あと」の現象や状況に着目します。「劣化したものは必ず修復しなければいけないの？」「原爆ドームはいつからそう呼ばれているのだろう」「今日の自分と明日の自分は違う？」など興味深いテーマに出会えるかもしれません。コレクションからは待望の新規購入作品、シリン・ネシャットによる夢と現実をテーマにした映像2点と複数の写真からなる大規模なインスタレーション《Land of Dreams》を初お披露目します。

▶キーワード

[#劣化](#) [#変質](#) [#修復](#) [#再生](#) [#原子力](#) [#原爆ドーム](#) [#爆発](#) [#夢](#) [#楽園](#) [#普遍](#) [#不変](#) [#治癒](#)

3 休館中のまちなかでの活動、そしてこれから



2m26「ツールボックス・プロジェクト」
より Photo: Nozomi Tomoeda

工事休館中は館外の様々な場所で活動を展開してきました。その成果の一部を展示に交えて紹介します。例えば、学校やまちなかへのお出かけから帰ってきた作品を展示し、あわせて学校での出張授業の様子を紹介します。また新スペース「モカモカ」には、まちなかにワークショップの空間を創出した、デザイン・ユニット 2m26 による「ツールボックス」が登場。これからは美術館のなかでたくさんの出会いをつくっていきます。そして広島市内の文字を調査し新しい文字をつくる「新生タイポ・プロジェクト」の活動は、館内表示やロッカーの数字に結実します。休館中に行ってきたユニークな実験が、リニューアルした美術館にどのように活かされていくのか、ご期待ください。

コレクションより

シリン・ネシャット 1957年イラン生まれ、アメリカ合衆国在住
写真、映像などを用い、イスラム社会を生きる女性たちの抑圧された状況をとり上げた作品など、世の中に存在するさまざまな不条理や矛盾、差別、抑圧、暴力をテーマに作品を制作。2005年、第6回ヒロシマ賞受賞。本展では、当館16年ぶりとなる新規購入作品《Land of Dreams》を初披露する。本作は映像2点と複数の写真からなるインスタレーション。映像の一部では、広島の被爆者のことばが取り上げられている。

オノ・ヨーコ 1933年東京都生まれ、アメリカ合衆国在住
1953年にニューヨークへ渡り、音楽と詩を学ぶ。1960年頃から前衛芸術家のグループ「フルクサス」に参加し、「インストラクション」と呼ばれる詩のような短い「指示」が書かれたコンセプチュアルな作品を制作。平和活動やフェミニズム運動などにも積極的に関わる。第8回ヒロシマ賞を受賞し、2011年に当館で受賞記念展を開催。本展では、その時のレクチャー&パフォーマンスにおいて書かれた《夢》を紹介する。

河原温 かわら・おん 1933年愛知県生まれ 2014年没
1959年から中南米、アメリカ、ヨーロッパを遍歴した後、ニューヨークを拠点に活動。66年から、制作される日の日付のみをその国の言葉(ただし、日本にいる際はエスペラント語)でその日の内に描き終わらせる絵画の制作を始める。このほか厳格なコンセプトに基づく作品制作によって、概念芸術の重要な作家として知られる。本展では、《Today》シリーズ他を紹介する。

田中功起 たなか・こうき 1975年栃木県生まれ、京都府在住
日常のシンプルな行為に潜む複数のコンテクストを視覚化、分節化することを目論み、映像やパフォーマンス、双方向的なプロジェクトなど、多岐にわたる活動を展開。本展で紹介するのは、2006年に台北で発表された《everything is everything》。現地で購入した日用品の新たな用途を探る様子を撮影した映像と、実際に使用された日用品とで構成される。プラスチックなどでできた日用品の劣化は避けて通ることのできない問題で、本展では作品だけでなく、作家と一緒に新たな保存のあり方を模索する実践の様子を紹介する。

若林奮 わかばやし・いさむ 1936年東京都生まれ 2003年没
鉄を素材とした抽象彫刻を数多く制作。人間と自然との関係を問い続け、彫刻の可能性を追究した。本展では《DOME》と水面に写る影を表した《水鏡》を紹介。《DOME》は被爆により鉄の部分があらわになった原爆ドームに関心を寄せ制作された巨大な鉄の作品。表面を焼くことで、持続する時間の中で原爆ドームが経てきた変化、すなわち強烈な熱線によって急激に押し進められた鉄の酸化と、その後も進行する腐食の過程に、自らのドームの時間を重ね合わせる。

16年ぶりの新規購入作品



シリン・ネシャット 《Land of Dreams》2019 Courtesy of the artist and Gladstone Gallery
© Shirin Neshat



オノ・ヨーコ 《夢》2012



河原温 SEPT. 8, 1984 《Today》シリーズ(1966-2013)より
© One Million Years Foundation



田中功起
《everything is everything》
2005-2006



若林奮 《DOME》1988

本展のための新作を発表

石内都 いしうち・みやこ 1947年群馬県生まれ、同地在住
染織デザインを学んだ後、写真家として活動を始める。自らが育った町を撮影した「絶唱、横須賀ストーリー」をはじめ、身体に残る傷跡や自らの母の遺品を題材とした作品を発表。2007年からは、広島平和記念資料館に収蔵される被爆者たちの衣服などを撮影する《ひろしま》シリーズに継続的に取り組む。本展では2019年の台風による浸水被害によりダメージを受けた自身の作品プリントを被写体とした《The Drowned》シリーズから未発表の新作を交えて展示する。



石内都《The Drowned#2》2020
Courtesy of The Third Gallery Aya
© Ishiuchi Miyako

コウミュキ 1994年京都府生まれ、同地在住
広島市立大学大学院で学ぶ。通常は「オスワリ」のポーズであることが多い犬の置物を、部分的に破壊し、組み立て直して立ち上がらせることで解放する《Stand Up!》シリーズを展開。「変身」や「野生」をテーマに、自然の美しさや、野生に備わる荒々しい美を喚起するように、動物をモチーフとして彫刻作品を制作。本展では、《Stand Up!》シリーズより新作を交えて発表する。



コウミュキ 《Stand Up!》 Series
「駆け出した犬、浮遊する象」2019
瀬戸内国際芸術祭 2019/小豆島・三都半島 での展示風景

高橋銃 たかはし・せん 1992年東京都生まれ、千葉県在住
彫刻の保存修復の現場に身を置きながら、現代美術の作家として活動。彫刻表現に要する技術を礎に、映像作品やインスタレーション、食用の飴や香油など、素材の持つ特性を最大限活かした作品を発表する。本展では、ブロンズの保存技法をそのままニンジンに適用し、その差異を密やかに問うた代表作《Cast and Rot》シリーズをはじめ、刻々と変化する香りを素材とした新作を発表する。



高橋銃《Cast and Rot No.13》2021
Photo: Ichiro Mishima Courtesy of LEESAYA

竹村京 たけむら・けい 1975年東京都生まれ、群馬県在住
家族、記録、失われたものの存在をテーマに、刺繍を施した布を写真やドローイングの上に重ねた平面のインスタレーションや、壊れた陶器の破損部分を絹糸で縫い直す「修復」シリーズを展開。本展では美術館の改修工事を進める中で意図せず壊れてしまった回廊のガラスや、役割を終えた品々を用いて、新作を制作・発表する。



左：竹村京《修復された G.美術館の電球》2019 右：竹村京《修復された T.家の電球》2019
Photo: Shinya Kigure

田村友一郎 たむら・ゆういちろう 1977年富山県生まれ、京都府在住
既にあるイメージや自らが撮影した素材をサンプリングの手法で利用し、連想や飛躍を介して再構築することで、時空を超えた新たな風景や物語を立ち上げる。近年は、場所に関するアプローチに着目し、場所の歴史やコンテクストを読み込み、入念なサーチに基づいた作品の制作を試みている。本展では、2019年に当館の建築意匠をモチーフにし、開館当時の写真を起点に制作した《ずるい彼》を再構成し、新たな要素を加えて発表する。



田村友一郎《ずるい彼》2019
「開館 30 周年記念特別展 美術館の七燈」展示風景、広島市現代美術館
Photo: Kenichi Hanada

毒山凡太郎 どくやま・ぼんたろう 1984年福島県生まれ、東京都在住
東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故によって、故郷である福島の状況が一変したことをきっかけに作品制作を開始。時代や社会状況に翻弄され、忘れ去られた過去の記憶や場所、現代社会で見えにくくなっている問題や事象を調査し、映像やインスタレーションを制作。本展では、広島でのリサーチを経てフクシマとヒロシマの考察を促す映像インスタレーションを発表する。



毒山凡太郎
《Long Way Home》2022
© Bontaro DOKUYAMA

平田尚也 ひらた・なおや 1991年長野県生まれ、埼玉県在住
インターネット空間で収集した既成の3Dモデルや画像を素材に、アッサンプラージュ（寄せ集め）の手法でVR空間にて彫刻を構築。リアルな世界とは異なるヴァーチャルな空間において、ありえるかもしれない世界をいくつも試すことによって、現実の事物の関係性を問い直し、彫刻の新たなあり方を模索する。本展では、VR空間で制作した新作を発表。鑑賞者はVRゴーグルを着用して作品を体験できる。



平田尚也
《Repetition game》2017

VRを利用した平田尚也作品の鑑賞について（2月初旬より予約受付スタート）

平田作品の一部は、VRゴーグルを装着して鑑賞していただけます。

事前予約の上、ご来場ください。空きがある場合に限り、当日会場でも申込可。



横山奈美 よこやま・なみ 1986年岐阜県生まれ、愛知県在住
トイレットペーパーの芯など、見向きもされないものに焦点を当てた静物画や、ネオンを成立させている背後のフレームや配線も同等に描いた油絵の「ネオン」シリーズで注目を集める。当たり前のもので捉えられている役割や言葉を前に既存の価値を捉え直し、すべての「もの」に備わる根源的な存在意義や美しさを提示する。本展では、様々な人が書いた手書きの文字「history」を描いた「ネオン」シリーズの新作他を発表する。



横山奈美《LOVE》2022
Photo: Hayato Wakabayashi

和田礼治郎 わだ・れいじろう 1977年広島県生まれ、ドイツ在住
広島市立大学、同大学院で学ぶ。宇宙、生命、時間など形而上学的なテーマへの関心を、物理的な現象や力学を用いた独自の手法で彫刻化する。腐敗し、消えていく生の素材を用い、環境に直接的に介入することで、空間や見る者の知覚に作用を及ぼす多次元的な彫刻作品を制作。本展では、展示室とつながる外部空間「光庭」を活用し、果物を素材とした、楽園（のその後）を想起させる新作インスタレーション他を発表する。



和田礼治郎《禁断の果実》（部分）
2016 パリ・レコレ国際センター
での展示風景
Photo: Martin Argyroglo

広報画像の提供に関して

- ・ご利用は本展をご紹介いただける場合に限りです。使用を希望する作家名をご連絡ください。
- ・画像掲載には、キャプション・クレジットの表記が必要です。
- ・画像の改変（トリミング、変形、部分使用、文字のせ）はしないでください。
- ・情報確認のためメールにて校正を送付ください。（校正不可の場合は、その旨ご連絡ください。）
- ・アーカイブのためお手数ですが、掲載誌、URL、番組DVDなどを送付いただければ幸いです。